

開校 100 周年記念
報道局特別連載企画

南高 あの前輩に学ぶ

「南高 あの前輩に学ぶ」最終回直前となる第4回は、本校の卒業生で現在は株式会社タカハシにて代表取締役社長を務める高橋洋一さんに話を伺う。当時の学校生活、そして現在までの軌跡を取材した。アルバイトから社長へ、高橋さんの人生を伺う中で、これまでと異なったビジネスマンの視点から南高生の在り方を知ることが出来た。

高橋洋一さん



「可能性を諦めずに」

ビジネス的将来観を学ぶ

プロフィール

1979年9月3日生まれ。本校卒業後、北海学園北見大学（現：北海商科大学）に進学。その後、株式会社タカハシに入社。2013年より株式会社タカハシ代表取締役社長

高橋さんの
高校生活は

発行所
網走南ヶ丘高校
報道局
発行責任者
我妻孝介

「球技大会に力を入れていた。教員チームが強くて、バレーボールの試合では鬼のようなスパイクを打っていた」と学校行事を振り返る高橋さん。南高祭の模様について伺うと「山車を作ってパレードをした。クラスイベントでは音楽と共に動く宇宙船を作った」と話す。その原動力は、「他のクラスとは違う事をやりたかった」という気持ちだったという。高橋生時代の自身を「とても明るい、楽しい事だけしている人間」と表現する高橋さん。「学校は楽しくなかった。面白い仲間も沢山いて、今でも

巧みな話術 秘密は

付き合いがある」と語る。部活動についても伺った。南高ではボート部に所属していたという高橋さん。もともとスポーツ少年で、小学校ではバスケットボール、中学校では弓道に取り組んでいたという。高校進学の際「全国大会に出場したい」という目標が来た高橋さん。そこで選んだのが、当時もとても全国的舞台に近かったボート部だった。

仕事との接し方は

アルバイトから昇格を続けて現在の地位に就いた高橋さん。アルバイト時代は「何をすれば自分の勤める店舗が1位になれるか」を考えながら働いていたという。「目標を自分で設けて、それをクリアして

求める 「人財」は

タカハシグループでは新たなことへの挑戦を続けている。最近ではデジタル技術の革新や働き方の変化、仕事の自動化に伴い、様々な事業で新技術の導入が図られている。では、今高橋さんが求める人材とは。「人は宝。『人財』ではなく『人財』という言葉を使っている」と前置きをしたうえで、「記憶するだけのインプットのみならず、記憶した知識を表現・活用するアウトプットが重要」と話す。

「誰もやらないことにチャンスが」

いくのが楽しかった。（アルバイトをする理由は）生活のため、というのもあるが、できなかったことをできるようにすることで成長を感じたため、という理由もあった」と話す。「大変なことは「傍目から見れば大変に見えるが、（自身は）『大変じゃない』と思っている。大変なこと、辛いことの方がビジネスにおいてチャンスになることが多い」とポジティブに答える。また、「誰もやらないことにチャンスがある。誰にでもできることは極端に言えば『あなたの代わりはいらぬ』ということ。『あなただけができない』の方が良い」と語った。

夢を叶えるには

高橋さんに「南高生が夢を叶えるために必要なこと」を伺うと、「夢を持つことと自分が素晴らしい」と前置きをしたうえで、「熱中できるもの、本気になれるものを見つけることが大事。高校生活では目標を定めて実現に向けて取り組むことが大切だと思う。そう言った『人財』が要求されてくる」とまとめた。

「娯楽のない街に娯楽を」

タカハシグループの沿革を訊く

株式会社タカハシの起点は高橋さんの曾祖父の代まで遡る。もともとは農業を営んでいたという高橋さんの家系だったが、10人兄弟全員に農地を分割して相続するのは難しい」と、思い切った農地を売却、そうして得られた資金で始めたのが映画館の経営だった。しかし、昭和末期ごろからカラーテレビの普及、レンタルビデオ店の拡大により次第に事業の継続は難しくなっていたのは平成元年のこと。

「街に誇りを」

取材の最後に、応援のメッセージをいただいた。高橋さんは「自分達の街にも誇りを持って欲しい。網走や北海道の可能性に、住んでいる人たちはあまり気付いていない。自分たちの街の魅力を感じて、地元でどういった貢献ができるのか考えてみてほしい」と地元の可能性を説く。

加えて、「自分が何をしたいか」は大切だが、今後は「課題を見つけ、解決に取り組むこと」が重要になる。そこにチャンスややりがいが見られると思う」とビジネスの視点からもメッセージを伝えた。最後には「自分の可能性を諦めないでほしい。可能性を信じて、見つけた課題や問題にとことん取り組んで」と締めくくった。

高橋さんの父の代に、映画配給会社「東映」の社員に薦められる形で参入したのが現在まで続くカラオケ事業だった。ちなみにこの「東映」の社員は、現在の「東映」代表取締役だという。会社の沿革を話したうえで高橋さんは「手伝いをしつつ、映画の仕事に携わる父の仕事を見てきた。映画館経営時代からある『娯楽のない街に娯楽を』という思いは今も変わらない」と話した。